

# 金井延とフェノロサ

## 史料紹介を兼ねて（上）

富 善 一 敏

### はじめに

筆者は、2019年度に東京大学経済学部資料室所蔵の金井資料の整理を行った（経緯については後述）。その中で、東京大学教師として論理学・哲学・哲学史・西洋哲学・世態学（社会学）・政治学・理財学を講述し、東洋美術や能を欧米に紹介したフェノロサ<sup>1)</sup>と、初代の東京大学経済学部長を務めた金井延<sup>のぶる</sup>との関係について、興味深い史料に接することができた。

金井延の女婿であり、社会思想家及び経済学者として著名であった河合栄治郎は、金井延の評伝の中で、金井とフェノロサとの関係について、次のように述べている<sup>2)</sup>。

同じ頃の日記に屢々書かれてゐるのはフェノロサ（E. F. Fenollosa）の名である。氏はスペイン系統の人で米国マサチューセツツ<sup>(ママ)</sup>洲に生れ、ハーヴァード大学を卒業して、東京大学の教師として赴任したのは明治十一年八月で年齢は廿六歳であつた。主として哲学科を教へたが兼ねて政治経済の講義もしたので、後に東洋美術の研究者として世界的に名声を博し、日本美術の為に著しい貢献を為したが、氏が政治学科でテキストとして用ひたのはミルの「自由論」やスペンサーの「社会静態論」「社会学原理」等であつた。然し論理学、哲学史の講義としては、シュウエーグラの哲学史によつてデカルトからヘーゲルまでの哲学を論じ、ウェアレスのヘーゲル論理学の英訳（W. Wallace : Logic of Hegel, 1874.）を使用した。当時千八百八十年代は米

国哲学界でもグリーン等の理想主義の影響を受けてゐたので、氏も亦グリーン、ウェアレスの思想に接してゐたのであらう、そしてカント、ヘーゲルにも親しんでゐたのかも知れない。氏がミル、スペンサーとカント、ヘーゲルとをいかに調和してゐたかは図り難いが、金井は好んでフェノロサの講義を聴き、深い感動を受けたらしい。明治十五年二月十八日の日記には、「フェノロサ先生より思想之法」（law of thought）を学ぶ（元は漢文、以下皆然り）とあり、又明治十六年三月二十四日の日記には「フェノロサ氏課業カント氏純理論を用ふ、而して余之を図書館に借るを得ず、故に哲学科第四年学生三宅雄二郎に依り氏の用と称して之を図書館に借る、氏諾す云々」とある。金井は予備門時代から哲学の研究に興味を抱いてゐたが、それはフェノロサによつて更に強められたであらう。そしてフェノロサが東京大学の哲学を独逸哲学へと転化せしめた先駆者だと云はれてゐるから、此の点も金井にとつて影響がなかつたとは云へまい。

本稿では、河合が抄出した金井延日記中のフェノロサ関係記事を紹介し、金井とフェノロサとの関係について考察することを第一の目的とする。

次に、フェノロサが東京大学で行った講義ノートについては、既に紹介や翻刻がなされており、先行研究として以下の三点の業績がある。

第一は、杉原四郎「フェノロサの東京大学講義—阪谷芳郎の筆記ノートを中心として—」であ

る<sup>3)</sup>。明治13年(1880)7月に東京大学文学部に進学し、17年6月に政治学理財学科を卒業した阪谷芳郎(1863~1941、大蔵大臣、東京市長、貴族院議員)が筆記した哲学史2冊、理財学3冊の自筆ノートの内容を紹介し解説を付したものである。

第二は、アーネスト・F・フェノロサ講述／金井延筆記、秋山ひさ編・解説『フェノロサの社会学講義』<sup>4)</sup>である。フェノロサが明治15年に東京大学で行った社会学の講義を金井延が筆記したノート(イエール大学バイネッキ図書館所蔵のフォトコピー、原本所在不明)を翻刻し、金井延の履歴にも言及しつつ詳細な解説を付している<sup>5)</sup>。

第三は、池上哲司監修・解題、竹花洋佑・西尾浩二・朴一功翻刻・翻訳・校閲『フェノロサ「哲学史」講義』<sup>6)</sup>、村山保史監修・解題、竹花洋佑・西尾浩二・朴一功・Michael Conway 翻刻・翻訳・校閲『フェノロサ「哲学史」講義(続)』<sup>7)</sup>である。明治16年に東京大学文学部に入学した高嶺三吉と清沢満之が、明治17年度にフェノロサが行った哲学及び哲学史の講義をそれぞれ記した自筆ノート(前者は金沢大学附属図書館所蔵『高嶺遺稿』、後者は西方寺(愛知県碧南市)所蔵清沢満之史料による)を翻刻し、翻訳を付している。

今回翻刻する *Notes in Philosophy and Logic* は、1年生を対象とする、論理学及び哲学の導入の性格をもつ講義ノートと考えられる。第二にあげた秋山ひさ『フェノロサの社会学講義』の解説は、金井が筆記した論理学の講義ノート<sup>8)</sup>の存在に言及しているが未紹介であり、本稿で翻刻を行い、試訳を付して掲載することに一定の意味があると考えている。

## 1 金井延と金井資料について

考察の前提として、金井延と金井資料について述べておきたい。

まず金井延について述べる。『世界大百科事典

第2版』<sup>9)</sup>は、「1865-1933(慶応1-昭和8)、明治・大正期の社会政策学者。静岡県生まれ。東京帝大文科大学卒業後、ドイツに留学し、G.シュモラー、A.ワグナーらに学ぶ。1890年帰国とともに東京帝大法科大学教授。日本におけるドイツ新歴史学派経済学の先駆者で、97年設立の社会政策学会の創設者の一人である。時局問題について積極的に発言し、金銀複本位制度の採用、工場法の制定などを主張した。戸水寛人ら七博士の一人として日露開戦を訴え、中国東北部への帝国主義的進出を説いた(七博士建白事件)。」と、その履歴を簡潔に記している。

また、大正7年(1918)11月18日調査「日本博士録」の監修用紙に金井延本人が記入したものの<sup>10)</sup>を下に掲げておく(表記は原文のママ)。

法学博士金井延

位勲 従三位勲二等

現職 東京帝国大学法科大学教授(一等二級)

担任講座 経済学第一講座

公職 帝国学士院会員・経済調査会委員・簡易

生命保険積立金運用委員会委員

出身地 静岡県

学歴及閱歴 静岡県平民金井海三の長男、慶応元年二月一日遠州豊田郡山田村に生る。明治二十四年先代カイの養子となり、同二十八年十月家督を相続す。先是同十八年七月東京大学政治学、理財学科を卒業して文学士の学位(当時ハ称号ニアラザリキ)を得。卒業後同学研究生となり、次テ大学院学生トナル、同十九年七月文部省より理財学修業の爲め満三ヶ年間独、英に留学を命せられ、最初ハイデルベルグ大学に入り、経済学国法学國際公法等を学び、同二十年十月ハルレ大学に、同二十一年十月柏林大学に転し、同二十二年八月倫敦トインビー・ホールにて応用経済学、殊ニ労働者問題を研究シ、同二十三年十一月帰朝す。同月二十六日東京帝国大学法科大学

教授に任せらる、同二十九年五月兼任大蔵省参事官、同二十四年八月法学博士の学位を受く。同二十九年七月以降文官高等試験及教員検定試験臨時委員たり、同三十一年五月免兼官、同三十二年一月鉄道国有調査会臨時委員被命、同四十一年七月欧米各国へ差遣せらる、同十一月帝国学士院会員に選任せらる。同四十二年十月帰朝、同四十三年十月二十二日陞叙高等官一等。大正五年四月経済調査会委員被仰付。同年盛大なる教授在職二十五年祝賀会を上野精養軒に挙げたり。

次に、金井資料の整理の経過と内容について述べる。

本資料は東京大学法学部が1968年2月17日に金井家より借用し、同年4月27日に返却したが、当時は小箱と大箱の2つに入っていた。法学部では「目録<金井延関係文書>」と題された650点の仮目録<sup>11)</sup>(日記、草稿、ノート、来状、文書書類、に分類)を作成した。全点のマイクロフィルム撮影が行われ、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター原資料部に架蔵されている<sup>12)</sup>。

2009年12月に情報学環が仮借用し、2010年春に、金属製の衣装ケース4函に入れられて当室に移管された(2014年に金井家より正式に寄贈)。2011年10月19日及び2012年1月16日に行われた京都大学経済学部資料室員への研修「記録史料調査実習」の際に、一部の現状記録写真撮影(写真1)及び概要目録を作成した<sup>13)</sup>。諸般の事情により作業はいったん中断したが、2019年4月下旬から同年11月下旬にかけて筆者が整理を行い、配列順の目録を作成し、中性紙封筒に入れ替えて、中性紙文書保存箱12箱に収納した(大判の写真は別置)。総点数は、全1,548レコードである。

その内容は、①明治13年(1880)～昭和7年(1932)にかけての日記、②学生時代の文書(講義ノート、英作文、スケッチ画、線図、試験問題及



写真1 金井資料現状記録写真(サンプル)

び答案、授業料関係書類、証明書、下宿願書、修了証、小遣帳など)、③留学中の文書(書籍、パンフレット、地図、在学許可証、勘定書など)、④東京大学、中央大学、明治大学ほか諸大学での講義ノート及び教科書、経済学演習記事録、試験問題及び東京大学学内行政関係文書、⑤演説原稿(和文及び英文)、⑥草稿類(河合栄治郎『金井延の生涯と学績』に収録されたものの原文、掲載誌の該当部分、及び同書への入稿用原稿(写し)が多数を占める)、⑦文官高等試験、海軍主計候補生採用試験、教員検定予備試験ほか試験問題、⑧各種辞令、叙位記及び宣旨、⑨宮中諸宴会及び観桜会・観菊会の召状、⑩大正4年(1915)大正天皇大札参列関係文書、⑪写真、の11のまとまりに分けられる。

この他関連資料として、名古屋大学経済学研究科附属国際経済政策研究センター情報資料室架蔵荒木光太郎文書中に金井延旧蔵資料(貨幣制度調査会及び税法整理案審査会関係)<sup>14)</sup>が、弘前大学附属図書館柳川文庫に重要調査会資料及び工場法関係資料が保管されている<sup>15)</sup>。

## 2 史料の紹介

### 2.1 金井延日記中のフェノロサ関係記事

ここでは、明治13年(1880)から同18年までの「金井延日記」の中から、フェノロサ関係記事

を抜粋して掲載する。

掲載にあたっては、原則として常用漢字を使用し、適宜読点及び並列点を付した。冒頭にタイトルと形態を( )で記した。「方」は「より」に直し、判読できなかった文字は「□」で示した。文中のアンダーラインや圏点はそのままと記した。筆者による注記は〔 〕で示した。

明治 13 年(「自明治十三年一月一日至同年三月三十一日 翻龍日記 一」<sup>16)</sup>、横半帳)

(2月6日)

違常、〔以下朱書〕「午後三時より六時マテ共存同衆洋語討論ヲ聴ク、終ニ至リ余少ク感スル所ロアリテ、洋語ニテ五分間計演説ス、此レ乃チ余ノ英語演説ノ始トイツテ而可哉(是日金子堅太郎、馬場辰猪、菊地大麓、フェネロサ、メンデンホール及ホイットマン出席、其外ノ人ハ欠席、傍聴人ハ只谷村太刀馬、成田練吉及余ノミ)」

\* (参考、明治 14 年「蟠龍日記 附会計表」<sup>17)</sup>、  
縦帳)

(12月11日)

数十日前予備門第一級理財学科終、教師千頭氏約一級甲(A)組以為社会論講儀、予隱聴之欲聴之而、此日第二時間無課業、了行千頭氏室、与該組聴氏講演

明治 15 年(「明治十五年壬午懷中日記」<sup>18)</sup>、縦 13 × 横 8.5 cm)

(2月18日)

是日穂積氏課外講義休焉、第四時間(從十一時半至十二時半)ホートン氏行英文学試業、以故不能聴八宗綱要講義、是日ジェボン氏倫理学書終、以故爾後復不出、於千頭氏教室從フェネロサ先生学思想之法(Laws of Thoughts)

(2月22日)

從前日フェノロサ先生伏病、以故雖当有論理之日、

無課業

(3月1日)

雖フェノロサ氏既出校、余級論理学課未始

(3月4日)

論理学未始、是以此日有法律課外講義、学八宗綱要講義有

(3月8日)

フェネロサ氏論理学自此日始、此課也不用課業書、唯因氏之講義耳、氏得妙於講義、此日初聴之大驚、蓋此課業法理文三学部一年生皆為一組聴講義也、故級甚大矣、フェネロサ氏大驚多数

(3月22日)

予備門第二期試業、自是日而余組此日有法律及論理学(千頭氏)等試業、法律通自八時半至九時半、論理学始於午後一時終干同二時半、無フェネロサ氏論理課業、以第二期試業始於明日也、氏論理学不被試験於第二学期大試業

(3月27日)

論理学試業始干午前十時三十分、終干<sup>(ママ)</sup>時三十分

(4月8日)

自此日課業始、於午前八時余級有時間之替、於前学期者三四焉、フェノロサ氏演第三学期第一講也、他者皆無課業

(5月10日)

フェノロサ氏休課

(6月10日)

フェノロサ氏論理学講義以是日全終、次会質問

(6月26日)

此日午後一時論理学試業始、与理学部一年級生等集於講義室共受之、蓋此日論理学千頭氏受持与フェノロサ氏受持兩課也、至午後四時全終

(9月21日)

フェノロサ氏為哲学第二年級和漢文学、第二年級講哲学史、然今尚講世態学、余欲聴之故謀氏、同許、則從此日出、然而一週間有不能日一、余不得止出席一週二度

(9月29日)

此日ラトギン氏不出校故、出於フェノロサ氏講義、蓋此日時間二者相抵触、如出於一不能於他、ラトキン氏講義者余正課也故、常不能出於フェノロサ氏、余每歎之、此日休課余之所最欲也、講義終而氏勸余等読フヒスク氏万有哲学第二卷世態学及自由意思篇、余故以午後行テ縦覧室読之

(10月28日)

午後五時三十分有学位授与式、余出席、此日受学位級六十二名有、総理加藤弘之、教授穂積陳重、矢田部良吉、三口秀、教師フェノロサ、文部<sup>(郷)</sup>等祝辞、至夜八時三十分式終、有宴会、不許生徒入場、余等窃行取酒肉、飽飲食而慕行、至一時漸就寢

(11月30日)

フェノロサ氏講義世態学也、既以前某日終故、自此日入哲学、先説其要漸進入哲学史、余此日出席

(12月21日)

冬期休業既在近、故外山氏課業以此日為最後、フェノロサ氏講義亦然矣而、氏既終説デカト氏哲学、氏近世哲学史中第一人也

明治16年(「明治十六年癸未懷中日記」<sup>19)</sup>、縦13×横9cm)

(1月1日)

早朝起床、迎春従例規行体操、七時食煮餅祝新正、須臾至八時則出門、於諸方賀新年、先行鈴木充美方投名刺、踵行於服部一三教師、フェノロサ、ラトキン三氏家各投名刺而去

(1月13日)

前学期中ハウス氏不日出席故、余級不能学英文学、至今学期ハウス氏止来校、予備門教師コックス氏代之、以毎火曜日第一時間又土曜日第二時間教余級、而此日其第一回也、則出席定課業方法(作文)及読本、而哲学課フェノロサ氏講義同時間也、故變之於他日未定日、此日休課

(1月16日)

フェノロサ氏土曜日講義為火曜日第二時間、且余則此日出席、而外山氏在同時、則請氏替之為第三時間

(2月8日)

[大雪につき]是以教師中有不来校者、同課フェノロサ氏不来

(2月22日)

此日雖出席於フェノロサ氏講義、因井上・三宅二氏於図書館、欲借カント氏純理説等之事、別無講義、純理説者自次回講義之傍用也、而不能得之故時日借他ノ書読之

(3月14日)

フェノロサ氏課業用カント氏純理論、而余不得借之於図書館、故佑哲学課第四年学生三宅雄二郎氏称氏用之借、又於図書館氏訪問、此日行得之、余則借之時々読之

(3月15日)

此日フェノロサ氏行平常試業、余故不出席於氏課業

(3月20日)

此日余不<sup>(出脱カ)</sup>席於フェノロサ氏課業、此日仏人ロリエー氏著元老院訳王権論第一冊、其第二冊未出版、右故休フェノロサ氏講義

(3月27日)

此日有枕草子試業、而フェノロサ氏無出校

(4月13日)

今学期ラトキン氏無講義、余故得毎金曜日第三時間目フェノロサ氏哲学講義、此日出席会、信夫氏課業在毎金曜日午後二時至三時、則頼氏、為午前第三時間、フェノロサ氏為第四時間目、皆可焉於是時間割得余意、而此日無信夫氏課業

(4月24日)

此日不出席於フェノロサ氏講義

(4月26日)

フェノロサ氏講義休課

(4月27日)

此日亦フェノロサ氏課業休

(5月3日)  
フェノロサ氏亦休課

(5月24日)  
余欠席フェノロサ氏講義

(5月25日)  
余再欠席フェノロサ氏講義

(5月29日)  
欠席フェノロサ氏課業

(5月31日)  
此日欠席フェノロサ氏課業

(6月1日)  
此日亦欠席フェノロサ氏課業

(9月13日)  
此日課業ラトキン氏国法学講義与フェノロサ氏  
哲学講義(余唯傍聴之耳、非本課)耳、其外未始

(9月26日)  
フェノロサ氏休課

(10月11日)  
此日フェノロサ氏止哲学講義告曰、自次回用ワア  
レス氏訳ヘーゲル氏論理学

(10月12日)  
此日フェノロサ氏限余級休課、以三時間講義身体  
大疲也、且告曰、從次回用弥雨氏理財書第一冊、  
蓋余等既略畢読、ケヤーンズ氏理財書僅余地税論  
一章耳、故暫止至弥雨氏地税論用、ケヤーンズ氏  
参考兩者而讀之

(10月13日)  
此日フェノロサ氏未始講ヘーゲル氏論理学、答哲  
学上質問〔割書〕「此日小石川金子氏老嫗来、渡曩  
所詫之柔術稽古着、余謝之」、余不出席

(11月10日)  
此日フェノロサ氏不来校故哲学休課

(11月22日)  
フェノロサ氏怒余等不用意於課業、不為講義便、  
余等讀書於此室、不出於哲学

(11月24日)  
フェノロサ氏ノ哲学課ヲ欠席シテ、午前九時与志

立氏ト共ニ出テ、校ニ行ク  
(12月6日)  
此日有フェノロサ氏理財学試業問題一耳、日貨物  
ノ需要ヲ論セヨト、終ル時既ニ晩シ、故ニ大沢氏  
ニ頼ムテ此日課業ヲ止ム

(12月13日)  
此日朝宿ヲ出ツルトキ最早八時五分過キナリ、余  
則チ富坂ヨリ人力車ニ乗シテ校ニ至リ、直チニフ  
エノロサ氏ノ教室ニ至ル、氏余等ニ命シテ再ビ試  
業ヲ行ヒ、資本増加ヲ論ズルトイフ題ナリ

(12月14日)  
此日フェノロサ氏休課

(12月20日)  
此日フェノロサ、ラトキン二氏皆ナ告ケテ曰ハク、  
余今日ヲ以テ今学期課業ヲ畢ハルト、余等大ニ喜  
ブ

#### 明治17年

(「蟠龍日記 明治十七年一月分」<sup>20)</sup>、縦13×横9  
cm)

(1月1日)  
〔前略、諸方へ年賀〕其ヨリ本郷文部省用地内ニ  
名刺ヲ隈本有尚(志立氏ノ名刺ヲ併ス)教師ラト  
キン、フェノロサノ三氏方ニ投ス

(1月24日)  
此日弁当ヲ持ズシテ学校ニ行ク、フェノロサ氏余  
等ニ命シテ地賃論ヲ題トシテ論文ヲ作ラシム、一  
時間ニシテ止ム、之ヲエキサーサイスト称ス

(1月25日)  
此日木下氏(第三(時脱カ)間)メニ改マル)講義受、フェ  
ノロサ氏課業休ミナリ

(末尾)  
此月月末ノ調べニ因ルニ、余ノ所持書籍ノ中ニ友  
人ニ借ス者左ノ如シ

(中略)

哲学字彙 松本源太郎氏へ  
フェノロサ氏世態学講義筆記 全氏へ

(後略)

(「明治十七年甲申閏年懷中日記」<sup>21)</sup>、縦 13×横 9 cm)

(2月2日)

此日ノ国際私法課ハ哲学課ト同時ナルヲ以テ出ズシテ、哲学課ニ出ヅ

(2月9日)

自此日余不出席於フエノロサ氏哲学講義、出於鳩山氏国際私法課、以其同時也、然火木兩曜日出席如元

(2月15日)

此日午後一時法学士斯波六郎氏新橋ヲ出発スルヲ以テ、木下氏・フエノロサ氏皆休課

(2月18日)

曩頼フエノロサ氏、変土曜日哲学時間、為月曜日第一時間、自此日始、余於是得出席於哲学及国際私法兩課、自此日読イングリッジ、シチザンス、シリーズ中トレール氏中央政府論

(2月28日)

此日フエノロサ氏哲学課ヲ休ム

(3月19日)

此日特別ニ八時半ヨリフエノロサ氏試業アリ、十時半ニ至リテ止ム、余故ニ木下氏ノ講義ニ出席セス

(3月25日)

此日三嶋氏出校ナキヲ以テ課業ハ唯タ独乙語ノミ、フエノロサ氏ノ哲学課試業昨今両日ナルヲ以テ、前週ヲ以テ其講義ノ終リトス

(4月21日)

此日フエノロサ氏哲学休課、又送書於三嶋氏、休其課

(4月30日)

此日頼岩谷氏、休課其独乙語、三時余外出、於麴町訪家君、家君曰、善哉々々、予有告所告子、期近日得見子、会子来事直弁、余問其改曰、遠州親睦会員古田新六氏寄書於加藤鼎三、問子知好古画

覽定者、米人フエノロサ氏否、加藤氏亦寄書於余問之、於子如何、余答曰、フエノロサ氏余教師也、家君曰、然近日於古田方告之依頼、至四時五十分余賞袴而去

(5月2日)

此日亦ラトゲン氏休課、余不出席木下氏講義、故此日課業唯フエノロサ氏理財学耳

(5月18日)

午前八時三十分行於番町、求遠州人古田新六氏居、暫而得即就見、談絵画鑑定之事、至十時辞去

(5月21日)

午後送書於古田新六氏

(5月22日)

古田新六氏答書至、余則諾、フエノロサ氏請古画鑑定、氏諾曰、土曜日午后二時可来於余家、余曩告古田氏以午後一時

(5月23日)

送端書於古田氏報、訪フエノロサ氏時期改午後一時、行於向柳原町、訪宮岡恒次郎氏、尋以西洋人応対之事

(5月24日)

午後一時三十分古田新六氏来訪、則共外出、自門前乘、此氏人力車行於本郷文部省用地、訪フエノロサ氏、請古画鑑定、全氏所持之画有、与古田氏画同図者口見、大驚於其奇遇、三時辞去

(5月27日)

此日フエノロサ氏行哲学科学期試業、余故不能出席グロート氏、此日亦休課

(6月5日)

此日フエノロサ氏課業書ケアーンズ氏理財要義巻終、從次回新不用課業書、有口授与質疑耳

(6月6日)

此日午後文部省官吏及大学諸氏開親睦会於礪川植物園、故木下氏及フエノロサ氏講義此日休課

(6月11日)

又フエノロサ・三嶋二氏因余等依頼休課

(6月12日)

フェノロサ氏休講理財学、有哲学講義

(6月13日)

木下氏及フェノロサ氏(理財学)講義以此日畢

(6月16日)

此日課業ラトケン、フェノロサ二氏耳、而皆以此日畢、ラトケン氏終結国法学講義、フェノロサ氏哲学講義尚余ヘエーゲル氏論理学一百枚余、故以明年再用此書

(10月2日)

自是日フェノロサ氏哲学課始、余則出席、而毎木曜日最初二時間也、余故出席第一時間耳、是日会横田氏講義休課、是以二時間共得出席

(11月2日)

文学会以午前九時開会、余幹事当直故先期行、演説者嘉納治五郎及フェノロサ二氏也、十一時五十分散会

(11月4日)

是日フェノロサ氏休課、岩谷氏亦不来校

(11月6日)

是日亦フェノロサ・横田二氏休課

(11月11日)

是日フェノロサ、岡村・重野・岩谷四氏皆休課

(12月11日)

是日フェノロサ氏及岩谷氏休課

明治18年(「明治十八年乙酉平年懷中日記」<sup>22)</sup>、  
縦13×横9cm)

(1月1日)

午前七時起床、八時林政二郎来員直去、余次外出、行テ本郷投名刺於ラトゲン・ストレンジ・フェノロサ・隈本有尚・グロート五氏、遇フェノロサ・隈本二氏

(2月5日)

此日フェノロサ氏・岩谷氏休課、午後ルドルフ亦休課

(2月12日)

余送返書於<sup>(阪)</sup>坂谷芳郎、加藤・江村二氏、加藤氏曩

送書、以余欲依頼書画鑑定於フェノロサ氏、余則語之氏、々告余、令加藤氏明日若明後日与余訪氏、今故送返書告之、且位<sup>(マア)</sup>其来日報処

(2月13日)

午前書至自加藤・江村、告其此日午后所来、余則予告之於フェノロサ氏、午後二時半加藤氏来、則伴至フェノロサ方請之鑑定、余為通弁、午后四時辞去

(2月19日)

横田氏課業変更、為毎木曜日最初二時間、自是日実行、余故告之フェノロサ氏、改其木曜日第一時間講義為金曜日第四時間、変ラトケン氏課為第三時間、皆諾、余満足

(2月20日)

自此日毎金曜日第四時有フェノロサ氏課業、余出席之、此日午時余帰夜再行

(2月26日)

此日横田氏講刑法休、治罪法余故得出席、於フェノロサ氏講義、此日了読ヘーゲル氏論理哲学、蓋尽力啓該書尅周年有余於茲

(2月27日)

此日有時間都合ラトゲン氏休課、第四時有フェノロサ氏課業、此日唯問答ヘーゲル氏著書中事耳、自次回新関応用哲学講義

(3月3日)

自此日フェノロサ氏始応用哲学講義

(3月20日)

此日横田氏休課、則出席於フェノロサ氏講義、岩谷氏亦休課

(4月9日)

此日課業横田氏刑法講義及フェノロサ氏講義耳

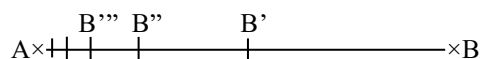
(4月10日)

午前十一時止出席於フェノロサ氏課業、与薄定吉氏等行テ浅草橋乗舟至向島、喫中餐









II. Euclid of Megara }  
Antithenes<sup>24)</sup> } Cynics which means dog-like × in which the famous Diogenes is included.

Antithenes<sup>25)</sup> divided everything that could be expressed into three parts, terms, propositions, 【2 枚目表】 and sylogisms.

III. Archytas. — “Doctrine of Categories”

The categories are the highest classes into which act the objects of knowledge can be reduced and in which they can be arranged in subordination and system. The word “substance” is a categories. The following are Aristotle’s categories: —

1. Substantia (Substance).
2. Quantum (quantity).
3. Quale (quality).
4. Ad aliquid (relation).
5. Ubi (place).
6. Quando (time)
7. Jacere (position).
8. Habere (possession).
9. Facere (action).
10. Pati (passion).

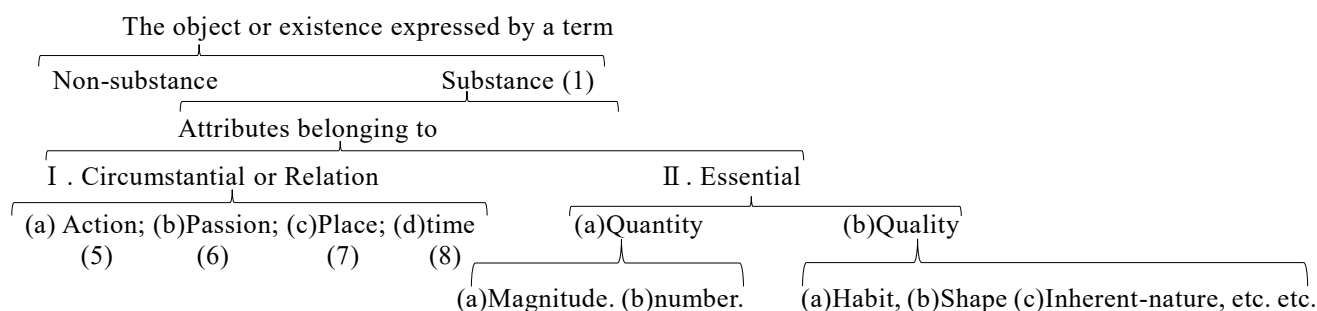
Of these:

1. Substance = Physical & Historical investigation.
2. Quantity = Mathematics.
3. Quality = Medicine

【2 枚目裏】

4. Relation = Ethics.
5. Action & Quantity = Astronomy, music, mechanics.
6. Passion & Action = Electricity.
7. Place (the where) = Geography.
8. Time (the when) = Chronology.
9. Position & Quality = Sculpture
10. Position & Habit = Painting.

All notions that can be called up to our mind is resolved in the following table: —



IV. Aristotle, founder of Logic as a science;

(1) “Organon”; (2) “De Interpretation.

(3) “Analytic Books (Sophistical Elenchi).

【3 枚目表】

V. (a) Galen (Discoverer of the 4<sup>th</sup> figure).

(b) Ammonius.

(c) Alexander and Porphyry

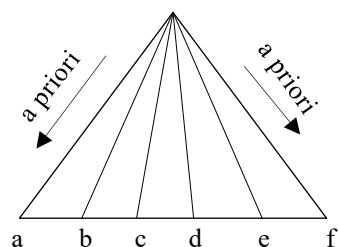
Porphyry treated of Predicables.

VI. Schoolmen.

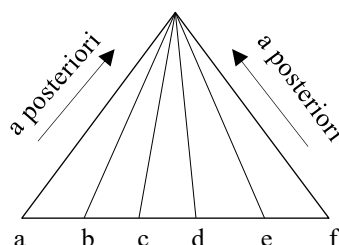
VII. Bacon.

“Novum Organon”

Aristotle or Deductive method



Bacon or Inductive method



VIII. Des Cartes, Pascal (His celebrated “Method”).

Recent writers on logic are: —

Whately, Hamilton, Thomson, Bayne, Mill, Bain (“Deductive & Inductive Logic”), Jevon, etc.

Philosophy.

I . All Thought is Comparison. —

Bain enumerates as the primary at-tributes of intellects as follows: —

1. Consciousness of Difference or Discrimination.

【3 枚目裏】

2. Consciousness of Agreement or Similarity.

3. Retentiveness or Memory.

In the primary state of savages, discrimination is very slight. Even Europe has only a few hundred years ago had only a very imperfect classification in sciences. For instance, the classification of Botany was such as Trees, Plants, & Shrubs.

## II. Difference between Common Knowledge and Science. —

John Fiske enumerates the points of difference as follows; —

1. In the power of quantitative prevision.
2. In the greater remoteness of the relations of likeness & unlikeness which Science detects & classifies.
3. In the greater generality of the relations which it classifies.
4. By the abstractness of the relations which it qualifies.
5. By the higher degree of organization.

### 【4 枚目表】

## III. Difference between Science & Philosophy.

Spencer points out the distinction between Science and Philosophy thus. “Knowledge of the lowest kind is un-unified knowledge; Science is partially unified knowledge; Philosophy is completely unified knowledge.”

Mr. Lewes, comparing the respective offices<sup>26)</sup> of Theology, Philosophy, and Science, says;

“Theology, Philosophy, & Science constitute a spiritual triumvirate. The limits of the respective dominions have been insensibly sifting, so that at various epochs they have been of very different importance. For centuries, the predominance of Theology was absolute & undisputed. Philosophy meanwhile grew apace, till at last it was enabled to assert an independent position; and while these two rivals struggled for supremacy, Science was also quietly & obscurely feeling its way to independence.

### 【4 枚目裏】

“The office of Theology is now generally recognized as distinct from that of Philosophy & from that of Science. - ----- It restricts itself to the region of faith and leaves to Philosophy & Science the region of inquiry. Its main province is the province of emotion; its office is the systematization of our religious conceptions.

“The office of Science is distinct. It may be defined as the systematization of our knowledge of the order of phenomena considered as phenomena.

“The office of Philosophy is again distinct from those. It is the systematization of the conceptions furnished by Science. . . . As Science is the systematization of various generalities reached through particulars, so Philosophy is the systematization of the generalities of generalities. In other words, Science furnishes the Knowledge & Philosophy the doctrine.”

In Method.

There are two methods of inquiry in 【5 枚目表】 Philosophy. One is called Subjective or Metaphysical or Ontological, the other is called Objective or Scientific or Positive. Lewes, in giving an answer to the question “What is truth?” says

“Truth is the correspondence between the order of ideas & the order of phenomena, so that the one becomes the reflection of the other— the movement of thought following the movement of things.” And, he continues to say;

—



Lectures on Socialism. ⊗

It is very lamentable fact, that if we inquire into the internal condition of every civilized nation, we see the abundance of paupers. In fact, Civilization produces Pauperism — the progress of Civilization is inversely proportional<sup>31)</sup> to the decrease of pauperism. This fact is well proved by the subjoining extracts.

⊗ These lectures are delivered by Mr. Chikami to the I .Grade, A division.

【7 枚目裏】 “According to Dr. Beggs” says the author of “Social Architecture”, “there are in the city of Glasgow thirty thousand dwellings, containing one hundred thousand persons, each such dwelling consisting of but one room, & in many cases windowless.” Again, he says; “The density of population in Liverpool is double that of London: 30,000 families in it, ~~all~~ or 150,000 people, reside in single rooms, of which 15,000 are cellars, often filthy, dark, & badly, if at all, drained.”

To complete the picture of misery, it is only necessary to remember the wretchedness of rural districts, and then we have a scene, sad, indeed, to contemplate. The Times Correspondent, writing from Ipswich on the 25<sup>th</sup> of May, 1874, describes some of the cottages inhabited by the poor agricultural laborers. At Metfield, he saw two cottages, with one bedroom each & nine sleepers in each. At Beggingfield, a cottage with one bedroom & still nine sleepers. At Warlingworth, two cottages 【8 枚目表】 with one bedroom each, & eight sleepers to each room. At Maypole Green, a cottage with one bedroom, for the accommodation of a man & his wife, two lads, four girls, & one child, etc.

What is said of Paris is as follows: “Paris”, says Louis Blanc, “the city of Science & Art, the radiant Capital of the civilized world, exhibits faithfully all the hideous contrasts of the boasted civilization. Superb promenades & muddy roads, glittering warehouses & gloomy workshops, theatres for singing & obscene places for weeping. In it are to be found the most horrible abominations & miseries; of persons prepared for vice by ignorance, & driven ~~by~~ into it by wants; of the professional thieves, swindlers, prostitutes, and bullies; of an army upwards of 60,000 ill-doers; of the lepers of the moral world, with fears of bestial countenances, speaking a pestilent language; of orgies where in brutal quarrels blood is often mingled in wine.”

【8 枚目裏】 The world is imperfect, because there is pauperism even in the most civilized cities of Europe, Paris, London, etc. There are several temporary causes of pauperism; but we will be investigate the cause which is unavoidable. Every man knows that the most prevalent opinion of the present day is the “Doctrine of Evolution.” In order to understand the “straggle for existence”, we must first of all know something of organic increase.

1 plant produces 50 plants; then  
 $1 \times 50 = 50$  at the end of 1<sup>st</sup> year  
 $50 \times 50 = 2500$  // 2<sup>nd</sup> //  
 ... ..  
 ... ..  
 ... .. = 971,656,250,000,000,000 at the end of 10 years.

Thus, the increase of organic nature is geometrical ratio which applies to the example.

Take the case of rats, for instance, one pair of rats produces 12 young in one year. The calculation might run something as follows:—

【9 枚目表】

pair

$$1 \times 12 = 12 = \text{the offspring.}$$

$$12 + 2(1 \text{ pair}) = 14$$

But according to modern naturalists, there are species innumerable of one genus and there several genus. If, then, the above geometrical increase were to take place actually, the earth would have no space life in the course of a few years. Hence the necessity of the “Struggle for Existence” in the organic world.

The habitable portion of the earth’s surface is

51 million square mile=

1,421,798,400,000 sq. feet.

Now according to Huxley, one plant requires 4 sq. ft. But according to the calculation of organic increase, the above space is insufficient even for a single Laid of plant. What, then, would be the consequence of the 【9 枚目裏】 world which consist of many genus of organic beings, each genus of several species, each species of innumerable individuals ?

Not only the irrational beings, but also the rational being, Man, increases in a geometrical progression, although the degree of increase is different. This is plainly proved to be true by Statistics. In 25 years, population in most countries doubles according to Statistics of Malthus.

But from a practical point of view, the increase is not geometrical for there are checks

The condition which check the rate of increase are various. Classified as simply as possible, they are as follows;

—

I . Climatic or rather meteorological condition, which comprises not only the mean temperature of the air or water, but the extreme heat or cold in the different seasons of the year, the quantity 【10 枚目表】 & intensity of sunshine at different periods, the number of clear & of rainy days, the quantity of ice or snow, the direction & strength of the wind, the press are of atmosphere & its electrical state, the nature of the soil, its elevation above the sea, etc.

II . Station, which means— given the climate, the particular kind of place in which animal or plant lives or grows; for example, the stations of tigers, lions, etc. & in the wood; the station of birds is in the forest trees; fishes, rivers; sharks, whales, etc, ocean; snakes, reptiles, etc, holes.

III. Food. By Meaning by this the scene total of the means of subsistence<sup>32)</sup> of animals & plants.

IV. Organic Conditions— meaning thereby the member, habits, food, propensities, etc. of hundreds of cotemporary animals & plants among which there are.

【10 枚目裏】

(1) Opponents { (a) Enemies, called Direct opponents  
(b) Rivals, called Indirect opponents.



- (2) Helpers { (a) Direct  
(b) Indirect

Hence, the geometrical increase holds true; but the above conditions must be fulfilled for animal existence, including of course the existence of man. Hence those that do not fulfil these conditions must die, & the fittest must survive. The competition is the most violent in the animals of the same species. Struggle for existence holds universal.

The answer to these questions will be found in the fact, that throughout the animal and vegetable Kingdoms, Nature has scattered seeds of life abroad with the most profuse & liberal hand, but has been comparatively sparing in the room & nourishment necessary to rear them. Were it not for the various circumstances which abstract this high-rated increase, the world would have 【11 枚目表】 long since overstocked with snakes, mice, etc. But the fact is, that there are various influences activity at work which check this high rate of increase. It is said that for 1000 seeds of plants or for 1000 young ones of animals, 999 die away before reaching maturity; or in other words, there must be severe struggle going on amongst all organic beings in a state of nature at all times & in all places. Only imagine what would take place, if 9 etc. snake & 9 etc. plants filled the surface of the earth! Imagine what would take place if the 10 etc. sharks filled the waters of the sea. We dimly realize how prodigious must be the slaughter which unceasingly goes on throughout the organic world. Indeed, this world is a theatre for the universal struggle for life, a constant war — the was which is fiercer than that of Waterloo…… This was arises not out of some accidental causes — as the question of succession, or of intrigue, or of an ambitious Napoleon — 【11 枚目裏】 but out of the disproportion between the number of places in Nature’s household and the excessive number of organic forms.

There are several methods by which animals are able to escape distraction. These methods are endowed by Nature. They are

I. Protective Coloration which consists in the protection of the animals themselves by certain peculiar colors.  
 II. Mimicry. There are South America certain order of butterflies called Heliconidae, which secrete a disgusting odor ~~which~~ & are consequently not catch up by birds. Certain butterflies, taking advantage of this fact, imitate the Heliconidae in every stripe & shade of color so closely that the two are hardly distinguishable. “In the Tropics”, says Wallace, “there are thousands of species of insects which rest during the day, cringing to the bark of ~~date~~ dead or fallen trees; & the greatest propertion<sup>33)</sup> of there 【12 枚目表】 are delicately mottolled with grey & brown tints, which though symmetrically disposed & infinitely varied, yet blend so completely with the usual colors of the bark, that at two or three fat distance they are quite indistinguishable.” Some insects resemble dead twigs of trees. Another case of mimicry is garnished by musk-rat. Audubon remarks that he often mistook the musk-rat for a clod of earth, so complete was the resemblance. Again the case holds true with fishy. It is said that type-fish, with its red-dish stream filaments, is hardly distinguishable from the sea weeds to which it crings with its prehensible tail.

From this, we can easily see that Natural Selection is unavoidable, but that Artificial Selection consists in the intention of the individuals themselves, Protective Coloration & Mimicry being of Artificial Selection.

Natural Selection is applicable to 【12 枚目裏】 all things. Nations & individuals advance by Natural Selection.

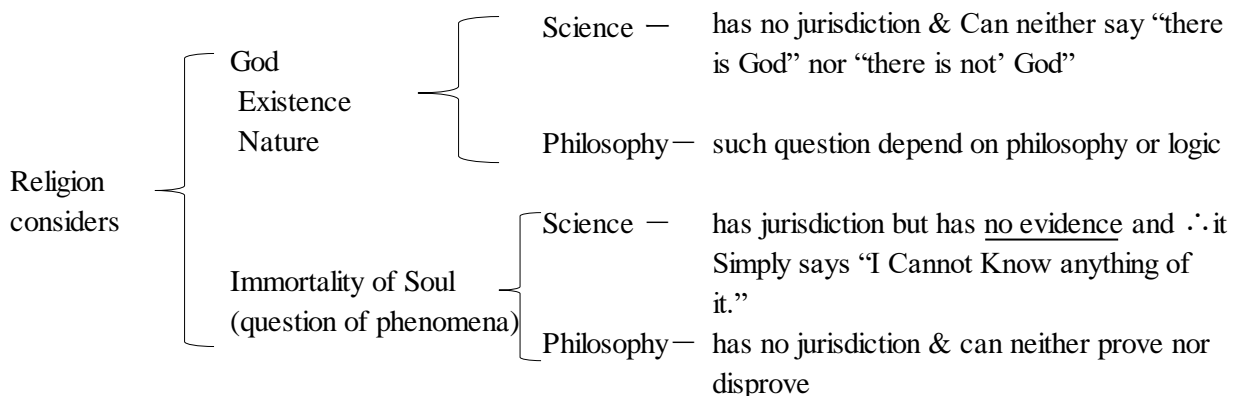
Stated in general, strongest will survive. The progress of savages simply depends on strength. What, then, would be the case of Natural Selection as regard? It is described as follows:

“In short, at every moment, in every given spot of earth’s surface, a struggle for existence is going on among all the forms of organic life, animal & vegetable, then & there alive; a struggle in which, as there is not room for all, the weaker, & the less adapted succumb, while the stronger & better adapted survive & be multiply. . . . . The creatures that are most in harmony with surrounding circumstances have a manifest, daily, & hourly advantages over those which are less in harmony: live when they die; nourish when they fade, endure through what kill others; can find food, catch prey, escape enemies, when their feebler, slow- 【13 枚目表】 er, blinder bretheren<sup>34</sup>, are starved ~~en-slaved~~ slain. Thus, the most perfect specimens of each race & tribe, the strongest, the swiftest, the healthiest, the most sagacious, the most courageous— those fullest of vitality— live longest, feed best overcome their competitors in the choice of mates; & in virtue of these advantages, become — as it is desirable they should be— the progenitors of the future race. The poorer specimens — the sick, the foolish, the faulty, the weak, — are slain or dropt out ~~out~~ of existence, are distanced in the chase, are beaten in the fight, can find no females to match with them.”

Such is Natured Selection. Here after I shall speak of Socialism which has, though not apparent at first, or great connection with Natural Selection.

【13 枚目裏】 Professor Fenollosa;— (写真 4)

The question of Science is the question of determinate causation in a certain particular space— reduction to particular phenomena. So ~~the~~ such question as the begining of time or the limit of Space is philosophical, but not phenomental of scientific.



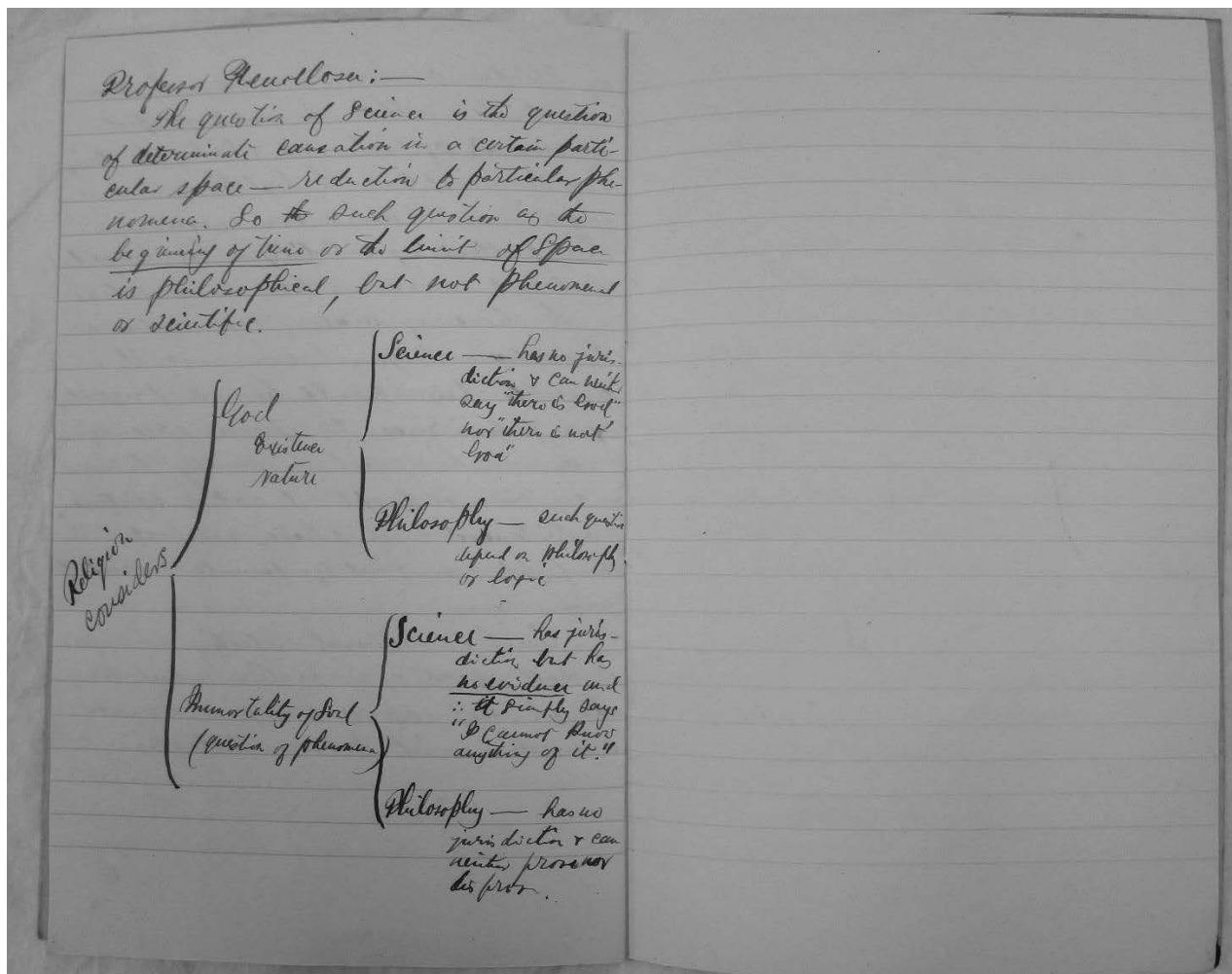


写真4 ノート末尾

(未完)

【付記】『Notes in Philosophy and Logic』の原本校合については、当室特任助教の森脇優紀氏に大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

(とみぜん かずとし：東京大学経済学部資料室学術支援専門職員)

- 1) 東京大学教師時代のフェノロサについては、山口静一『フェノロサー日本文化の宣揚に捧げた一生—上』(三省堂、1982年)第2章「東京大学におけるフェノロサ」を参照されたい。
- 2) 河合栄治郎『金井延の生涯と学蹟』日本評論社、1939年、16-17頁。なお、旧漢字は常用漢字に直した。
- 3) 『季刊社会思想』第2巻第4号、1973年、189-205頁。阪谷の筆記ノートは国会図書館憲政資料室所蔵阪谷芳郎関係文書中に現存し、公開されている。
- 4) 神戸女学院大学研究所、1982年。
- 5) なお、当室架蔵の金井資料中には、このフォトコピーの原本は存在しない。
- 6) 2013年。
- 7) 2016年。
- 8) フォトコピーの中に、「Lectures on Logic」(1882.3~)が存在するが未見である。注4秋山書104頁。

- 9) 平凡社、1998年。
- 10) 金井資料 1:6/10/5。
- 11) 同 1:5/8。
- 12) なお、このマイクロフィルムを使用した最近の研究として、前原淳史「七博士事件」の再検討ー「金井延日記」を中心としてー『社会科学』第48巻第2号、2018年、277-305頁、同「金井延の対露観と外交思想」『文化史学』第75号、2019年、113-135頁、がある。
- 13) 白井亨「東京大学経済学部資料室での研修を受けて」、『東京大学経済学部資料室年報』第2号、2012年、118-122頁。
- 14) 本資料については、<https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/erc/collection/araki.html> から画像のダウンロードが可能である(2020-3-10閲覧)。
- 15) 小岩信竹「<資料紹介>金井延関係、農商務省所管、明治・大正期重要調査会資料(一)～(四)」『弘前大学文経論叢(経済学篇)』第39・40・45・46-47号、1986-1990年(弘前大学学術情報リポジトリからダウンロード可能)。
- 16) 金井資料 4:6/15/1。
- 17) 同 4:6/15/8。
- 18) 同 4:6/14/1。
- 19) 同 4:6/14/2。
- 20) 同 4:6/14/3。
- 21) 同 4:6/14/4。
- 22) 同 4:6/14/5。
- 23) 同 3:4/7/4。
- 24) Antisthenes の誤記カ。
- 25) 同上。
- 26) pices の誤記カ。
- 27) このアンダーラインは赤色。
- 28) Timaeus は Timaes の e と s の間に u を鉛筆書きで挿入したもの。
- 29) icosahedron の誤記カ。
- 30) このアンダーラインは赤色。
- 31) propotional の誤記カ。
- 32) subsistence の誤記カ。
- 33) proportion の誤記カ。
- 34) brethren の誤記カ。